

～ 資料編 ～

I 指導計画 (全9時間予定)

過程	時間	学習活動 形態 全体【全】 グループ【グ】	支援および指導上の留意点	・評価の観点と評価方法(○) ・十分に満足できると判断できる状況(◎)
気 付 く	1	<ul style="list-style-type: none"> LDにてケチャを鑑賞し、風土・宗教・生活習慣などの文化や歴史と音楽とのかかわりを考える。【全】 ケチャの演奏パターンを分析する。 LDにて「ギラッ」を鑑賞する。 ワークシートを活用し、ガムランの概要について学習する。【全】 	<ul style="list-style-type: none"> ガムランと同じ地域の音楽であるケチャの鑑賞を通して、インドネシアバリ島の風土・宗教・生活習慣などが感じ取れるようにする。 宗教儀式、物語との強い関連性、指揮者不在、一定の法則に則った音楽であるなどの特徴に着目し感じ取りながら鑑賞できるように、配慮する。 ケチャが「声のガムラン」と言われる理由を説明し、ガムランの概要や音楽が生まれた必然性を探求できるよう助言する。 	<p>【エ①】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○バリ島の風土・宗教・生活習慣などの文化や歴史的背景を知覚しながら楽曲全体を聴いている。(発言・ワークシート・行動観察) ◎音楽の特徴とのかかわりを意識している。
	2	<p>見通し1</p> <ul style="list-style-type: none"> 「ギラッ」のパート別演奏を鑑賞した後、キーボードの音を頼りにペロツ音階を見つけだす。【グ】 工夫して楽譜化する。【グ】 独自の楽譜をグループごとに発表する。【全】 ペロツ音階について学習する。【全】 	<ul style="list-style-type: none"> DVDの楽器の製造工程場面を鑑賞することで、音色やペロツ音階の特徴を理解できるようにする。 ペロツ音階を感じ取れるよう、同じ部分を繰り返し鑑賞する。 グループごとにキーボードを準備し、その音を頼りに話し合いながらペロツ音階を見つけだせるようにする。 平均律にあてはまらない微妙な音程差に対しては、グループ独自の方法で楽譜化する。その際、図形化、線譜化、文字化など様々な方法で作成できるよう助言する。また本来は記譜しない音階であるので、自分たちなりに音を記録することに重点をおくため、記譜に対する楽典的な能力は問わない。 ペロツ音階の音律(音階を決定する基準)の特徴を視覚からもつかみやすいよう、挙がった音符は全て板書し、分類する。 伝承方法についても音名を使用し、特徴を感じ取りながら理解できるようにする。 	<p>【ア①】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ガムランの音色や奏法の特徴に関心をもっている。(行動観察) ◎表現上の効果に関心をもっている。
	3	<ul style="list-style-type: none"> 「ギラッ」を鑑賞し、リズムや演奏形態について一定の法則を見つけだし、ワークシートに記入する。【グ】 	<ul style="list-style-type: none"> 8拍1周期、強拍の位置、繰り返しの音型、楽器ごとの拍の長さなど、音楽の特徴を感じ取れるよう、繰り返し鑑賞する。 	<p>【イ①】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○リズムや演奏形態の特徴を感じ取っている。(ワークシート・発表内容) ◎表現上の効果を感じ取っている。
		<ul style="list-style-type: none"> つがいのリズムパターンの練習をする。【グ】 	<ul style="list-style-type: none"> 難易度の高い楽器についてはあらかじめリズム譜を準備し、全体でパターン練習を行う。パート分けの際参考にするよう助言する。 	
	4	<ul style="list-style-type: none"> 「ギラッ」を鑑賞し、特徴を生かした代替楽器を次の3つの観点 	<ul style="list-style-type: none"> 代替え楽器を選択する際、三つの観点をふまえて、グループごとに選択できるよ 	<p>【イ②】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○音色や音階の特徴を感じ取

表 現 す る	からグループごとに選択する。 【グ】 ①本来の楽器に近い音色 ②本来の楽器に近い音階 ③グループ独自の音色	うにする。 また代替え楽器として以下を準備する。 グロックン・ビブラフォン・シロフォン・ キーボード・ハンドベル・トーンチャイム・ コンガ・ボンゴ・スネア・タムタム・箏・ ウッドブロッグ・リコーダー・アングルンなど	っている。 (評価シート楽器選択理由) ◎特徴を生かして奏法を工夫 している。
	5 ・グループごとにパートを決め、 練習を行う。 【グ】	・グループ合奏のパート分けは、個々の能 力に応じて選択できるよう、配慮する。 ・主体的に練習に取り組めるよう、目標や 練習内容を記入できる評価シートを準備 し、練習の成果を自己評価できるように する。	【ア②】 ○意欲的に練習に取り組もう としている。 (行動観察・評価シート) ◎自分なりの目標をもって取 り組んでいる。
	6 7 8 ・リズムや演奏形態などの特徴を 生かした創作表現を工夫する。 【グ】 ・グループ創作による「ギラッ」 を発表する。 【全】 ・他グループの発表について、ガ ムラン合奏として工夫している 点を挙げ、講評を書く。 【全】	・基本的な演奏形態を提示し、一定の法則 に則った上で、リズムや演奏形態など感 じ取った音楽の特徴を生かして創作でき るよう助言する。 ・工夫の難しいグループには、小節数やブ レイクの入れ方について助言する。 ・鑑賞の観点を示し、他グループの発表と 自分たちの演奏を比較しながら鑑賞でき るようにする。 ・他グループの講評を書くことで、自分の 創作や音色・奏法の選択、演奏などと比 較しながら、ガムランの特徴について再 確認できるようにする。	【イ③】 ○音楽を特徴づけている諸 要素を創作表現に生かし ている。(発表内容) ◎創作表現を工夫している。 【ウ①】 ○リズムや奏法を工夫して 表現している(発表内容) ◎グループ全体の調和を意 識して演奏表現している。 【エ②】 ○演奏形態の特徴を聴き取 っている。(ノート) ◎感じ取った諸要素の特徴 を照らし合わせながら講 評を書いている。
広 げ る	9 見通し3 ・ペロツ音階と琉球音階を比較し て共通点を見つけだす。 【全】 ・雅楽の「越天楽」を鑑賞し、ガ ムランとの共通点を見つけだす。 【全】 ・感じ取った音楽の特徴を楽曲に 照らし合わせながら「ギラッ」 を鑑賞する。 【全】 ・音楽のもつ様々な側面について 理解を深める。 【全】	・共通点を見つけやすいよう、音階が作り やすい箏を使用して琉球音階を引き出す。 ・DVD にて沖縄民謡を聴き、琉球音階とペ ロツ音階の音律を比較できるよう、紙上 鍵盤で確認する。 ・既習曲である「越天楽」を鑑賞し、演奏 形態や音楽の諸要素についての共通点 を見出せるようにする。 ・学習の過程で感じ取った音楽の特徴を再 確認し、照らし合わせて鑑賞できるよう 助言する。 ・我が国の音楽とガムランを比較しながら 表現上の効果を見出せるようにする。 ・体験を通して感じ取った音楽を特徴づけ る諸要素や文化・歴史など我が国の音楽 との共通点などをまとめることによって、 音楽に対する感じ方や考え方を深められ るようにする。	【エ③】 ○ペロツ音階と琉球音階、 ガムランと雅楽との共通 点を見いだしている。 (ワークシート) ◎共通点から音楽と文化や 歴史とのかかわりについ て、自分なりの考え方を まとめている。

II 教材について

1 用語の説明

(1) ガムラン (gamelan) とは

インドネシア、マレーシアを中心に発達した伝統的な合奏音楽。古代ジャワ語のガムル (gamel) が語源であり、握る、金属弦をつまびく、楽器をたたくという訳がある。楽器編成は様々な種類の旋律打楽器を数多く使用する点に特徴があり、主な素材には青銅、竹、木などが用いられる。

(2) ギラッ (gilak) とは

バリ島に伝わる代表的な楽器編成ガムラン・ゴング・クビヤール (gamelan gong kebyar) の中の一形式名称。基礎を収得するための練習曲である。8拍1周期からなり、強拍は拍節周期の最後にくる(8拍目が一番強い)。カウントをとる単音他楽器(カジャル)、拍節周期を示す銅鑼(ゴング・ラナン、ゴング・ワドン、クンプル)、骨格旋律を示す旋律打楽器(ウガル)、リズム・テンポを示す太鼓(クンダン)、旋律を装飾する旋律打楽器(ガンサ、プニャチャ、ジュブラッグ、ジェゴガン)、さらに細かい装飾を演奏する旋律打楽器(レヨン)、竹製の縦笛(スリン)、弦楽器(ルバブ)などで構成されている。

(3) ペロッ (pelog) 音階とは

ガムランでは主にペロッ音階とスレンドロ音階の2種類の音階が使用されているが、本研究ではペロッ音階を扱う。これは1オクターブをある規則性をもって5音に分けた音階であり、西洋音楽の平均律(いわゆるドレミファソラシドの音階)とは異なる。楽器製作も職人の勘に頼られており、それぞれの集落で独自の演奏形態やピッチを持つ。独自のイメージをもつことができる。

2 教材の意義

(1) 本研究では主教材として、インドネシア、バリ島に伝わるガムランの一形式「ギラッ」をグループ合奏として扱うが、その意義を次に挙げる。

- ア 楽器の構造、音階、リズム、演奏形態などの特徴がわかりやすいので、鑑賞する際の観点を明確化できる。
- イ 西洋音楽との相違点(楽譜・ピッチ・楽器の規格がない、指揮者不在など)が多く、新しい感覚で音楽を認識しやすく、既習事項における苦手意識を取り除ける。
- ウ ペロッ音階は本来五線譜に描き表わせないため、独自の楽譜を創作しやすく、記譜の有効性に気付くことができる。
- エ 独自の楽譜から、その音を表現するための楽器を用いる必然性に気付くことができる。
- オ 鑑賞するというより体感する音楽であるため、体験的に感じ取る活動が組みやすい。
- カ アジア地域の音楽なので、我が国の音楽と比較し共通点を見いだしやすい。

(2) その他導入やまとめの学習において扱う副教材の意義を次に挙げる。

- ア 導入として扱うケチャは同じ地域の民族音楽である。1960年代に、ドイツ人のワルター・シュピースがボナ村とウブド村のサンギャンといわれる儀礼に、ラーマ・ヤナを台本として創作した観光芸能である。音楽が根ざしている背景やリズムの特徴を理解するのに適していると考えられる。
- イ 音階の比較として琉球音階を扱う。これはペロッ音階とほぼ同じ配列の音階であり、特徴的な響きをもっているため、共通点を見いだしやすい。
- ウ 演奏形態の比較として雅楽の「越天楽」を扱う。これは指揮者を置かない、詳細な楽譜はない、一定の周期の繰り返される、拍のとり方やテンポは演奏者全員の呼吸を合わせて演奏するなど共通点が多いため、比較しやすい。